巻頭言

大学教育開発研究センター年報 第１号の発刊にあたって

新潟大学長　武　藤　輝　一

平成６年春に新潟大学大学教育開発研究センターが発足しましたが、この度、同センターの年報第１号が上梓の運びとなりました。積極的な活動に併行して、発足後１年ほどで発行に至りましたのは関係者の皆さんの並々ならぬご努力によるものと感謝いたしております。

ご存知のごとく昨年春に本学の教養部は改組転換されましたが、教養教育の重要性を考慮し、さらに将来に向かって新潟大学における教育、研究のあり方を検討することの必要性を認識し、全学の皆さんの強い要望に基づいて、学内措置として大学教育開発研究センター（以下、大教センターと略します。）を設置いたしました。センター長には理学部の吉村尚久教授が併任の形で就任され、本学庶務部内に設置されました企画室で山本克巳企画室長ほかの方々が事務を担当されることになりました。まず、大きな課題を抱えております教養教育の企画、運営が最初の仕事ということになりましたが、新潟大学の教養教育は全学出動の形で担当するという約束でありますので全部局から394名の教員の方々に教養科目担当教員として大教センターに登録して頂きました。

このように教養教育が全学出動という新しい形で実施されることになった結果、平成７年度において学生諸君が教養教育として選択できる科目は従来の約1.2倍に増えました。選択の巾が広がったことは学生諸君の学習意欲を高めることになります。教養教育は人間形成の基礎となるものであります。教員の方々のご協力に感謝しますと共にこの成果に大いに期待いたしております。

勿論、大教センター設置の目的は教養教育の円滑かつ効果的な企画、実施だけではなく、専門教育のあり方も含めた学部教育全体の検討、開発も担当することであり、また現在、高度化を必須としている大学院のあり方についても調査、検討を行うことになるでしょう。21世紀に向け沢山の宿題を抱えることになりますが、大学の教育、研究の基礎の一つとなる本センターへの教職員の皆さんのより一層のご支援をお願いしなければなりません。

大教センターには系列別専門グループなどのほか、いくつかの委員会やグループができて、活発に討議が行われており、その結果は全学教養教育委員会や評議会などの審議等を経て実施されております。このような経過や成果を誌上に報告し、大学内外の方々に認識して頂き、同時に批判もし

て頂くことは大教センターは勿論のこと、新潟大学自身にとっても必要なことであります。年報の意義はここにあるものと思います。そして大学内外の方々に大教センターを身近に感じてもらうことができるものと思います。現在は学内措置による学内共同利用施設の１つという形ではありますが、成果を積み重ね努力して省令で認可された施設としなければなりません。誰がみても当然のことであろうかと思っております。

ところで教育改善には、何と言っても長い教育経験に基づいた教員の方々のご意見は必須のものですが、講義や実習をうける立場にある学生諸君の経験から出た意見も大切なものです。今回、いくつかの学部で行われた教育改善に関する学生諸君へのアンケート調査の結果も本号に掲載されています。これらの結果は今後の本学における学生教育の改善に役立つことでありましょう。医学部では専門課程における講義も実習もすべて必須でありましたので、最終学年の６年次学生に６年間の医学教育の履修をほぼ終える卒業直前に専門課程を振り返ってもらい、各講座ごとの教育について感想を書いてもらうアンケート調査が行われてきました。中には学生諸君の勝手な考えもありましたが、多くは建設的な意見であり、大変参考になりました。今後、本学では学生諸君のアンケート調査を行う機会が多くなることと思います。

視野を広くし、内外の他大学の異なったシステムやその成果を参考とすることも大変有用なことです。啓蒙されるところが少なくありません。意外と気がつかないでいることが少なくありません。今回は３回のワークショップの内容も掲載されています。“人のふりみて我がふり直せ”はありふれた言葉ですが、他施設の優れているところも取り入れたいものです。

21世紀に向け、大教センターでは教養教育は勿論のこと専門教育のあり方についても開発、研究を行い、教育の実際について企画、立案することは申すまでもなく、それを実施する部門でもあり、担当者の方々のご苦労も多いことと存じます。従って、学内の皆さんから忌憚のないご意見を頂く一方で、積極的なご協力を頂かなければなりません。年報第１号の出版を喜ぶと共に大教センターの活躍と発展に期待している次第です。